

# バウハウスに関する論考 その1 バウハウス運動の時代背景

正会員 ○ 黒川 剛\*

バウハウス           ヴァイマール共和   ヴェルサイユ体制  
                                国  
ナチス                帝国文化院           ウイーン体制

## 「ヴァイマール」を準備したものの二つの体制の崩壊

19世紀はウイーン会議（1815）で始まり、20世紀はヴェルサイユ会議（1919）で始まったという説を唱える歴史家たちがいる。とすれば、ヴァイマール共和国とバウハウスの発足は20世紀の幕を切った出来事ということになる。

そこでウイーン体制とは何だったのだろうか。ウイーン会議の指導理念は「正統主義」であった。三十年戦争で疲れ切った欧州の王侯たちが独立国家の均衡的併存を求めて合意したウエストファリア体制（1648）は18世紀までどうにか生き延びたものの、フランス大革命とそれに続くナポレオン戦争で崩壊してしまい、人民主権などという危険な思想まではびこりだした。ナポレオンに対する勝利を好機として、オーストリア、ロシアそしてフランス（反革命派）のリーダーたちはウイーンに集まった群小諸国の王侯たちを社交行事でたぶらかしつつ（「会議は踊る！」）密議を重ねて、大革命以前の状態こそ正統（legitim）なものであると主張し、旧体制の復活をはかり、おおむね成功した。戦後日本風にいえば「逆コース」の勝利である。

しかし、この新体制は長続きしなかった。ナポレオン率いるフランス国民軍に自国を蹂躪された欧州諸国では新たな国民意識が高まっていた。就中ビスマルク率いるプロイセンは、それまで三十数か国に分裂していたドイツ語圏諸国をライヴアルともいえるオーストリアを排除しつつ糾合して、普仏戦争に勝利した機会にドイツ帝国の成立を宣言し、これによりウイーン体制は事実上崩壊した。オーストリアとロシアの帝政は屋台骨が傾いており、英仏はアジア、アフリカの植民地獲得競争で対立し、ドイツの抬頭を制御する力をもたなかった。ビスマルクは自国の孤立を防ぐべく均衡維持外交を展開していたが、世紀末に彼を追放した皇帝ヴィルヘルム II 世は政治・軍事大国を指向しており、1914年のセルビア青年によるオーストリア皇嗣暗殺という小さな事件が欧州大戦に膨張する前提がすでに形成されていたのであった。

ではヴェルサイユ会議はいかなる新体制を築き上げたのであろうか。本来ならば戦勝国英仏はウイーン会議のひそみに倣い敗戦国ドイツをも抱き込んで永続的安定に

つながるような戦後体制の構築を試みるべきであった。しかし英仏は戦争自体には勝ったものの史上初めての総力戦で国力を使い果たしてドイツに劣らず疲弊しており、しかも時代は民主主義に移行し、指導者はドイツ懲罰を求める世論に配慮しなければならなかった。途中から参戦し国力に余裕がある米国は講和十四ヶ条や国際連盟設立案などを携えて登場したが、ウイルソン大統領はやがて熱意と主導力を失い、講和条約は英仏の対独報復主義を骨格とするものになり、しかも米国議会は条約への参加を拒否した。ヴェルサイユはその名に値するような新体制は構築しえなかったのである。

## 産婆なしで生まれたひ弱な共和国

このような情勢のなかでドイツはどのように第一歩を踏み出したのであろうか。ドイツの悲劇は、旧政権が突如崩壊したため、準備の出来ていない諸勢力が共通の政権構想を持たないまま新たな国家を構築しなければならなかったことと、国民が敗戦の実感をもたず、しかも講和条件が極めて厳しかったため、戦勝国への不満のみならず、このような屈辱的な講和を受け入れた新政権への信頼感が極めて乏しかったことである。新政権は共和国憲法案を起草して民意を問うたが、アカデミズム的理想主義にもとづく議席配分の完全比例代表制度や緊急時の大統領令などが弱点となって、政情は安定性に乏しかった。20年代初期のルール占領に続く超インフレや、それ自体は小さな事件に過ぎなかったヒトラーのミュンヘン一揆などが想起される。20年代中葉はシュトレゼマンの手腕もあって対外的、国内的にやや安定した時期であったが、やがて左右の過激勢力が議席をのぼし、米国の大恐慌に発した世界経済の破綻の煽りをくって共和国は14年の短い生涯を閉じることとなる。理念上は最も進歩的な民主主義体制を構築しながらそれを支える国民の多数派を見出しえなかったのがヴァイマール共和国の悲劇であった。戦後処理を全うできぬままに次の敗戦へとバトンを渡す羽目に陥ってしまったのである。

## ドイツ版百花斉放・複数の文化拠点

しかしこのような政治の不安定、社会の脆弱さは必ずしも国民の精神活動まで麻痺させてしまうものではなかった。プロイセン的な権威主義政権が崩壊し、後継政権は

政治・経済の最低限の秩序維持に迫られて国民の意識を一定方向に誘導するような理念を示しえず、国民とくに知識階級は現状への不満、怒りの発散を求めている・・・このような状況は精神活動の多方向への活発化をもたらした（我が国でも敗戦直後坂口安吾や太宰治が文名を挙げ、黒澤明などが国際的に高く評価される映画を生み出したことが想起される）。かてて加えて、こうした文化活動はロンドンやパリといった政権所在の大都市に集中するのではなく、全土の中小都市でも競合的に展開された。統一国家の成立が遅れたドイツ語圏では各地に割拠する王侯が自国領内での学術文化の振興を競い合っていたのである。ゲーテやシラーがヴァイマルという小さな町で芸術活動を展開したことは良く知られており、ドイツの高名な大学はハイデルベルクやゲッティンゲンにある。バイロイトのワグナー音楽祭は今日まで続いており、欧州を代表するマイセン磁器はザクセンの王室製陶所から生まれたのだった。この構造はヴァイマル共和国にも受け継がれたのであり、現在のドイツ連邦共和国でも学術文化は各州の主管であって、連邦政府は文部省を持たない。

このような百花斉放はもとより共和国の成立により突如現れたものではない。ドイツに限らずナポレオン戦争後のヨーロッパでは、文化を創りそして支える役割は王侯貴族の手から大ブルジョワに移り、さらに19世紀中葉以降は小ブルジョワが主役となった。彼らは装飾過多の権威表現を好む古典主義とも、感傷過多で民族主義に陥りがちな浪漫主義とも袂を分かち、より明快で合理的な、あるいは逆により内省的・主観的な表現を指向した。ヴァイマル文化と総称される花々は、大戦前ヨーロッパ各地で播かれていたさまざまな種が戦争終了をまって続々と開き始めたものといつて良いであろう。

#### 「履行外交」の仇花

19世紀前半のヨーロッパは国家が基本的な構成単位であり、君主と国民の縦のつながりが重視されていたが、世紀の後半にはいと市民階級の拡充と交通通信手段の発展により国境を越えた横のつながりが大きな役割を演ずるようになり、新興の社会民主主義政党も労働者の国際的連帯を唱えていた。この動きは戦争によって中断されたものの、戦後の社会が安定するにつれて再生されていった。バウハウスがヴァイマルからデッサウに移転した1926年を中心とする数年間は、上述のシュトレゼマンが首相・外相をつとめ、ヴェルサイユ条約の諸条項を忠実に実行するという「履行政策」を展開してフランスをはじめとする諸隣国との信頼感を醸成しつつあった（シュトレゼマンは良き協力者であったフランスのブリアン外相とともにノーベル平和賞を受賞している）。こうした機運は芸術の分野での国際協力をも推進することとなり、バウハウス運動にもドイツ人だけでなくスイス、

ハンガリー、ロシアなどの芸術家が参加するに至った。しかしこの相対的安定期はニューヨークの株式市場崩壊により米国の対独短期投資が引き上げられたためあっけなく幕を閉じた。

#### 民族主義と浪漫主義の呪い

ヴァイマル共和国がわずか14年の寿命で姿を消したことの「真の犯人」については、上述の憲法の欠陥、ヴェルサイユ条約の苛酷さ、さらにはヒトラーの天才など数多くの様々な指摘が行われている。これを継いだものがナチの独裁であったことを遺憾とする論調が多いが、この時期にヨーロッパではロシア（ソ連）に続きイタリア、スペインそしてやがてポルトガルと独裁政権が成立し、わが国でも独裁には程遠いとはいえ軍部による異常な権限行使があったことを考えると、ナチの政権獲得をドイツ特有の現象として把握するのではなく、より巨視的に国際政治の流れの中で捉えるべきであろう。

それは別の課題として、新政権の指導者たちは些か皮肉なこと芸術愛好家を自任しており、多数の芸術作品を購入・押収により所蔵していた。そこには特段の偏見はなかったが、国内の同時代的芸術活動については、ドイツ人こそ究極的支配民族であり、ドイツの歴史と文化はすべてに勝り、ドイツの支配実現のための行動はすべて正当化されるという指導理念を掲げ、そのために学術文化活動はドイツの伝統を無視して中央政府の統括下におかれ、国民宣伝啓蒙省のもとに帝国文化院が設置された。美しく正しいものは「民族的」でなければならないというのである。こうした政策のもとでは、合理的・機能的なものこそ美しく、その美しさは国家や民族を越えて普遍的なものであるという理念を掲げ、しかもユダヤ人が積極的に参加しているバウハウスが生き延びる可能性は閉ざされてしまった。

数多くの学者・文化人がナチ体制に服従せず、そのために起訴され、幽閉され、沈黙をあるいは自裁を強いられた。同時に数多くの学者・文化人が米国をはじめとする外国に亡命し、現地で活動をつづけた。戦後ドイツに戻ったものもあり亡命先に留まったものもあるが、いずれも夫々にヴァイマル時代に築かれたものが新生ドイツで発展的に受容されることに貢献した。こうした人々の活動は改めて評価されてしかるべきであろう。

#### 参考文献

- 1.近代ドイツの政治と社会、林 健太郎、弘文堂
- 2.ヴェルサイユ体制、小林栄三郎、文藝春秋社
- 3.ワイマル文化、P. ゲイ、みすず書房
- 4.Die Auflösung der Weimarer Republik, K.D.Bracher, Ring-Verlag
- 5.Von Bismarck zu Hitler, S.Hafner, Verlag bei Kindler